

お姉ちゃんが買った、ねじ巻パン ～原和子さんの満州体験～

満州国は、今から八十四年前の一九三二年、中国を侵略した日本が世界の国々にの意見を無視して、中国北東部に一方的に作り上げた傀儡国家である。日本政府は「満州へ進め！」と国民をあおり、人びとは満州に行きさえすれば豊かな暮らしができると信じ、海を渡っていった。

原和子は一九三六年、四才のとき満州に行った。三才下に純子という妹がおり、家族は最初、両親と姉妹の四人だった。父は結核の予防や治療をする団体で事務の仕事をしていて、その活動を広めるため、大陸におもむいたのだ。列車と汽船を乗りついで、満州の首都、新京の駅に到着する。ホームにおり、天井の高い立派な駅舎に向かう。

日本から来た家族は、改札口を通るとき、あれっと思っただ。日本人用の改札口は正面に堂々と置かれていたのに、中国人用の改札口は、片隅の薄汚れたところに追いやられていたのである。五族協和を唱い、それぞれの民族が仲良く暮らす国を理想に掲げた満州国の、これが現実だった。

一九四一年、太平洋戦争が始まった年、和子に弟が生ま

れた。亮一という、まん丸い顔をして、とても愛くるしい子だった。

「亮一は、私がおっこするのよ！」

和子と純子は、亮一のお守りの役を取り合ってたほどだ。

やがて戦争が末期を迎えた一九四五年七月、一家は満州の九台きゅうたいに引越しをする。父が、日本人のために作られた、国立結核療養病院の事務長になったのだ。

ここは、都会と違い、緑豊かでのんびりとした田舎だった。駅を降り、中国人の街を抜けていくと、小川に沿って柳の並木が並んでいる。橋のたもとには屋台が出ていて、何の店かを見ると、中国人の床屋だ。泥んこ道を、現地の子どもが鞭を振り上げ、何十羽ものガチョウを追っている。森に囲まれた大草原のまん中に、病院が建てられていた。畑を切り開いて作った、病院の手前にあるレンガ造りの集合住宅が、和子たち病院関係者の家だ。

病気をしたため一つ学年が遅れ、六年生になっていた和子と、四年生の純子は、日本人の小学校まで四十分も歩い